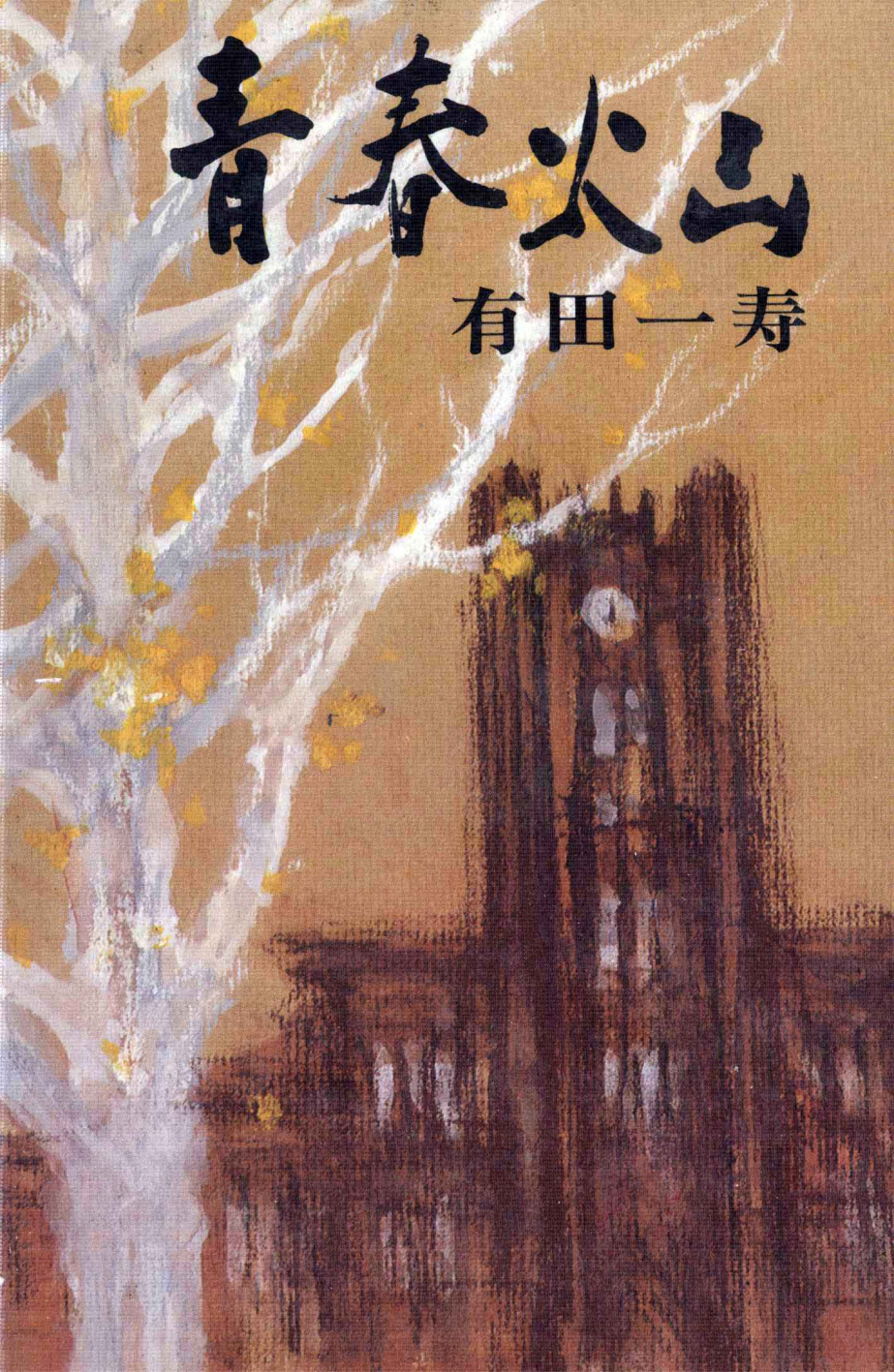


青春火山

有田一寿



青春火山

有田一寿





著者紹介

有田一寿

ありた かずひさ

〈略歴〉大正五年生。幼少の時父母に死別。昭和十六年東大文学部卒。太平洋戦争に出征、四年後終戦により復員。青葉ヶ丘女子中学、高等学校長を経て実業界へ。日経連教育問題委員長、中教審委員、国連大学準備調査委員、放送大学準備委員等を歴任。昭和四十九年参議院議員となる。

〈現在〉西日本工業大学、九州工業高校、筑紫工業高校、青葉ヶ丘女子高校各理事長。久留米工業大学、香蘭女子短大、東福岡高校各理事。クラウンレコード(株)、若築建設(株)、ユニオン映画(株)各取締役会長、福岡放送(株)取締役

〈著書〉「愛はほとばしる泉の如く」「愛すれど愛は悲し」「日本の教育を考える」ほか。

青春火山

一九七八年九月二十日

初版印刷

一九七八年九月二十五日

初版発行

定価 九八〇円

著者 有田一寿

発行者 堀内末男

発行所

株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一〇

郵便番号 一〇一

電話 出版部 二三〇一六三六

一

印刷所 大文堂印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたします

「青春火山」に寄せて

五木 寛之

最近、私はいわゆる小説作品と称されるものに、あまり感動しなくなったような気がする。それは多分私の感受性がいつのまにかしなやかさを失い、人間に対する優しさと、世界に対するいきいきした好奇心を失ってきたせいかもしれない。しかし必ずしもそれだけではないのではなからうか。それは私自身が書くものも含めて、近代小説そのものが次第に暗く狭い袋小路に頭を突っ込んで、素朴でおおらかな物語性や、なまなましい想像力を欠いてきたようにみうけられる事にも一つの原因があるのかもしれない。

しかしまた一方には、小説と言うより、むしろ大説と呼んだほうがふさわしいたぐいの文学作品も少なくない。死んだ後も若い学生達に支持されている高橋和巳の作品などにもその傾向はあったように思う。

しかし私はそのような政治的、抽象的な物語について行けない自分を感じていた。近代小説の息苦しさからも脱却し、かつまた大説のどこか空々しい世界からも脱け出ているような、そんな作品があれば、としばしば考えたものである。

有田一寿氏の「青春火山」を読んだのは、ちょうどそのような私の心の渇きが一種の暗鬱な気分をかもし出している時だった。私はその、小説作品としては決して巧緻とは言えぬ長篇を、自分でも驚くほどの熱中ぶりで夜を徹して読み上げた。そしてまだ幾分余熱が残っている頭で、この作品が自分をこうまで惹きつけたものは何だろうと考えた。窓の外に、まだそれほどスモッグで濁っていない夜明けの京浜工業地帯の空があり、はるかに遠望される三浦半島と鉛色の海が見えた。それを眺めながら私の心を満たしていたのはある自由で広々とした感情だった。それは活字を読むことでこのところ受けることの少なかつた人間的な或る種の感動と言えただろう。

この自伝的な小説は決してプロフェッショナルな作家の手によって書かれたのでもなく、また文学的な栄光を目指して創られたのでもないだろう。いささか古風な文脈や生硬な会話などを指摘することも出来ないではない。また、作中人物の政治的な立場や心情には、私自身のそれと対立する部分もある。

にもかかわらず、この作品は確かに私を強く揺り動かしした。私を惹きつけてやまない何かがあった。小説にあきたらず、大説について行けない疲れた私の心を激しく打つものがあった。

それが何であるかを具体的に説明することは私には難しい。それは読み終えた後に各自がみずから考えることだろう。だが一つだけ言えることは、この自伝的な物語には常識的な文学の尺度で測れない何かがあると言うことだ。この小説の世界は青春の或る苦い真実と、まぶしいばかりの純粹さに満ち満ちている。主人公の修太の理想主義的な情熱は、た

えず挫折の危機をはらみながらも屈することがない。それは、私にとっては大丈夫らしいばかりである。尾崎士郎の「人生劇場」のロマンティズム、ロマン・ロランの人道主義的倫理観、さらにトルストイ流の立体的な人間認識など、私達のこれまでに触れたさまざまな傾向が、この作品の中には見受けられる。そしてそれを借り物の思想にしていなのが、作者のひたむきで強烈な個性だろう。

この作品を読んで共鳴するのも反発するのも、それは人々の自由である。しかし心に或る渴きを抱いている人間、また何かを求めながらもそれを見出し得ぬ鬱屈を覚えてゐる人間は、必ずこの作品の世界にさからいがたく引き込まれてしまふに違いない。そこから何をたずさえて帰って来るかは、それぞれ異なるはずだ。だがそれは一つの精神的な経験としてその人間の内部に作用するだろう。

私自身は職業的な作家として、大きな反省と刺激を受け、同時にまた歩一歩とみずみずしい心から遠ざかりつつある人間として、潮風の中に裸で立つような爽やかさを覚えた。あえて個人的な感想を寄せさせて頂いたのもそのためである。

青春火山●目次

「青春火山」に寄せて

五木寛之

1

プロローグ 11

第一章 青い雲を追って 12

第二章 知己を求める旅 28

第三章 ブーゲンビリアの思い出 47

第四章 萌え出づる春 66

第五章 黒い霧の中で 79

第六章 風に揺らぐ葦 95

第七章 芦ノ湖の夕焼け 106

第八章 獅子の戦い 120

第九章 嵐の中の時計塔 136

第十章 悩み迷う小羊 148

第十一章 いつの日かアジアは 161

第十二章 行く道は遠けれど 170

第十三章 若者たちの歌 188

第十四章 母の呼ぶ声 204

第十五章 世紀を築くために 220

著者のひとりごと

237

题字者
装丁
土居淳男

青春火山

プロローグ

秋の空はあくまで快晴である。

上海に向けて飛びつづけるこの中国民航機は、成田を発つて既に三時間——眼下には白い雲波が重なり海は見えない。

窓に額をつけるようにして流れる雲を見ている楠見修太に、隣席の片瀬が声を掛けた。

「楠見、上海で志保子さんが待っていると君はいつてたが、黄君も一緒だろうか？」

「もちろんそうだよ。黄君は、農林省の若手のホープである君を義兄の李光民氏に紹介したいということだから、黄君本人も一緒に来ているはずだ」

「そうか——なつかしいなあ」

片瀬はそうつぶやきながら、昔を偲ぶかのように眼を細めた。

海陸開発という会社の企画課長をしている楠見修太と、片瀬英助は高校、大学にかけての同期生である。大学を出て農林省に入り、すでに九年になる片瀬と、民間の港湾建

設の会社に入った楠見修太とは、職場は違うが心の通いあった親友同士である。共に三十二歳という年齢は働きざかりである。

修太は、広州交易会に出張することになった時、偶然片瀬も公用で中国に渡ることを知り、話しあって同じ中国民航機に予約をとった。

「片瀬、君はどうして結婚しないんだ」

窓の外の雲を見ながら、つぶやくように修太が問いかけた。

「……………」

返事が無いので、修太がふと振り返ると、一瞬とまどったような淋しげな片瀬の眼がそこにあった。

「——うん、その内にな」

そう答える片瀬の眼を見ながら、修太は、（聞くべきでなかったかな）と、自らのことは悔やまれた。

（青春の傷口は、片瀬の中にあつて、まだ傷あとを残しているのか。すべては終わったと思っていたが、まだ片瀬の中で心の奥に思い出として生き続けているのか）

修太は眼をつぶった。修太の回想は、東大に合格して東京に向かった十四年前に遡っていった。

第一章 青い雲を追って

夜汽車の振動に身をまかせながら、うつらうつらしていた修太は、車掌の声に眼を覚ました。

「おやすみ中のところをお邪魔いたします。皆様の中にどなたか中国語のおできになる方はいらっしゃいませんか？」

と、中年の車掌は丁寧なように頭を下げ、それから左右を見ながら、修太の横を歩いて行った。

誰も応ずる者はいない。困った顔の車掌は、また戻って来て、

「どなたかいらっしゃいましたらお願い致します。中国人のお客様が困っていらっしゃいますので——」

それでも誰も立つ者はいない。

もう一度雑誌を顔に伏せて眠ろうとしていた修太が、車掌の弱りきった顔を見るとじっとしておれず、

「車掌さん、僕は学生ですが、お役に立てば……」

というと、車掌は満面に喜色をみなぎらせ、

「そうですか、助かりました。実は中国の方が、何かしき

りにおっしゃるのですが、全然分りません。急いでいるらしいので困っていました」

案内する車掌について、修太はグリーン車にはいつて行った。汽車は姫路を過ぎたらしい。

「こちらさんです」

いわれて、見ると十七、八歳であろうか、美しい中国服の女性が見上げている。

「晩安（イブニング今晩は）、僕は隣の車に乗っている学生ですが、ご用は何でしょうか？」

「有心（イコウシン）（ありがとうございます）」

といって、その娘は静かに立ち上がった。

その声の美しさ、清潔な美貌……修太はまぶしいような思いでその顔を見つめた。

「実は、私は神戸で降りて、父の泊っているホテルに行くことにしていましたが、父は東京に行っていることが分りましたので、このまま東京に行きたいのです。東京までの切符に買い直したいのです。そして、二時間あとに下関を出た特急『あさかぜ』に兄が乗っていますので、その兄にも、神戸で降りず東京に来るよう電報を打ちたいのです」

美しい広東語でゆっくりと語られた内容を、修太はそのまま車掌に通訳し、東京までの乗車券に買い替えた不足分の金額も清算してやった。

「東京まででは、まだ十時間くらいかかります。寝台券がご希望なら、あるかどうか分りませんが、一応車掌にきいてみましょうか?」

「如果你舞睡我 我希望咁样(お願い出来ましたら、そうしたいのですが)」

と、すがりつくような眼差で修太を見た。車掌にきいてみると、

「多分あるでしょう。ただ神戸まで行かないとはつきりしません」

という。

修太はなるべく都合してくれるように頼み、あれば自分まで連絡してくれるよう車掌に念をおして自席に戻った。

(中国語が役に立ってよかった。近所に広東から来た中国人の学生がいて、三年間、彼と親しくつき合いながら日本語との交換教授をしていたことが、こんなところで役に立つとは思わなかった。しかし——なんと美しい娘さんだろう……)

眼をつぶったがなかなか寝つかれない。それでも、雑誌を取り出して読むともなくページをめくっている内に、いつの間にか、うとうとと夢路をたどっていた。

「横浜、横浜——」

抑揚のあるマイクの声が、旅人の郷愁をそそるようにホームの屋根に吸い込まれていく。その声につられるように、何人かの乗客はそそくさと降りて行った。

沼津を過ぎた頃から降り始めた雨は次第に烈しさを加えてきたようだ。修太は、窓をつたう水滴を眺めながら、なんとなく物悲しいような、それでいて何か心の底から、衝き上げてくるような勇氣に似たものを感じた。

(そうだ!! 夢だ!!)

修太は思う。高校卒業の時のアルバムの寄せ書きにも、
「何処まで続く夢だろう」と書いた。また、彼の亡くなった父の親友だったという東大の遠野教授から来た手紙にもそう書いてあった。修太は、内ポケットからその手紙を取り出して開いてみた。

「東大入学おめでとう。

お父さんが生きていたら、どんなにか喜ばれたことでしょう。あなたの夢の一つが今実現したわけです。ご満足のことと思います。

人生は一つの夢です。多くの人々の中には、夢を見ない人もいます。夢のない人には悲しみがありません。しかしまた、喜びを味わうことができないということも事実です。私は五十四歳の今日まで夢ばかり見続けてきました。あなたの亡くなられた父上も、最後まで夢を

見続けた方でした。

「夢を追う人生——なんだか小説の題のようなことばですが、これが私の人生観です。近く上京されるそうですが、その時は、あなたの若々しい夢に触れさせていただきますでしょう。老人の夢の跡も聞いて下さい。（自分ではまだ青年のつもりですが……）」

東京に着く時間を前もって知らせて貰えば、家内を迎えにやります」

列車は品川を過ぎて既に東京都内にはいったらしい。雨は益々烈しく、窓の外は茫としていて見えない。乗客はそれぞれ下車の支度を始めた。

（いよいよ東京か——夢にまで見た東京）

修太は武者震いに似たものを感じながら、たった一つのスーツケースを網棚から降ろした。わずかな身の廻り品のほかは書籍ばかりを詰めて来たためズッシリと重い。急に列車がカーブを切ったため左によろめく体を、足をふみしめてこらえながら、彼は大きく深呼吸した。

（ああ、東京——）

若い興奮を感じながら、もう一度呟いてみた。

修太がスーツケースを提げてプラットホームに降り立つと、先に降りて待っていたのか、昨夜の娘が立っている。

修太の姿を見つけると小走りに走って来て、

「早晨、多謝承蒙照顧。咄我失陪了（お早うございます。いろいろお世話になりました。ではこれで失礼します）」

と何回も頭を下げて礼をいい、人混みの中にまじって去って行ったが、途中で一度振り返ってニコッと笑った笑顔が、すがすがしく美しかった。

修太は、急に出発したため、遠野家にも東京着の時間は通知していなかった。

誰も出迎えに来ていないので、降車口の方に波のようにうねって行く旅客達の中にまじって一人で歩いて行った。

山手線を池袋で西武電車に乗り換え、椎名町で降りた頃は、雨もすっかりあがり、和やかな春の日射しが柔かく大地を包んでいた。

修太は、二年前初めて遠野家を訪ねた時の記憶を辿りながら、街中の道を歩いて行き、やっと目あての福音教会の横に出た。遠野家はその隣である。

「まあ、修太さん、すっかりお変わりになって」

と、出て来た遠野夫人は、二年前そのままの親しみ深い態度で修太を迎えてくれた。

「やあ楠見君、多分、今日明日だろうと待っていましたよ。さっきも、皆で君の噂をしていたところですよ」

教授も和服姿で、笑いながら書斎から現われた。修太は